

看護学の学士課程修了時の学生が語る「看護職としての『私』」

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-06-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 古都, 昌子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.20780/0000023514

氏名	: 古都 昌子
学位の種類	: 博士 (看護学)
学位記番号	: 甲第 28 号
学位授与年月日	: 平成 27 年 3 月 6 日
学位授与の要件	: 学位規則第 4 条第 1 項該当
論文題目	: 看護学の学士課程修了時の学生が語る「看護職としての『私』」 : “Me’ as a nurse” narrated by nursing students upon completion of undergraduate nursing course
論文審査委員	: 主査 教授 佐藤 紀子 副査 教授 小川久貴子 教授 守屋 治代

博士論文要旨

I. 序論

看護系大学が急増する背景の中で 2009 年に看護師国家試験受験資格の要件に大学における教育を修めて卒業した者が明記され、看護職が学士教育に相当する職業であることが法的にも明示されたと言える。一方では、医療情勢の中で、看護職の需要は増加の一途であり、看護学教育は、医療系以外の学問領域と比して、職業としての看護職の資格取得と直結している。

先行研究では学士課程修了時において、看護師として就職する直前の学生に着眼し、青年期を生きる人としてその内面から記述した研究は見られなかった。

本研究では、看護学を学ぶ人をとらえる新たな視座を開発するために「看護職として生涯発達しているひとりの人」として看護学の学士課程修了時の学生をとらえ、その語りから「看護職としての『私』」について記述したものである。

II. 研究方法

1. 研究デザイン：語りを用いた質的記述研究
2. データ収集期間：2014 年 2 月末から 3 月初旬
3. 研究協力者：看護学の学士課程 4 年次で、看護師国家試験を終え、卒業を間近にしており、看護師として病院の就職内定を得ている学生をスノーボール・サンプリング法により募集し、研究協力に同意の得られた者である。

4. データ収集方法：研究者が個別のインタビューで協力者と向き合い、語りを対話によって生成していく方法を用いた。本研究に先立ち、研究者は実習場面のフィールド研修を行い、ひとりの人としての立ち位置から学生をとらえる必要性を見極めた。また、前年度の同時期に2名の協力者のプレスタディを実施し、教育者としての思考の枠組みを解き放つ解釈の準備を行い、語りやすい雰囲気づくりができるように努めた。

5. 結果記述の方法：インタビューを通して得られた語りから逐語録を作成し、繰り返し読み込んで語り全体を俯瞰し、浮かび上がる「看護職としての『私』」をテーマとして表現した。その後、協力者ごとにテーマ、タイトル、ナラティブテキスト、解説、[解釈]を記述した。

本研究は、東京女子医科大学倫理委員会において、倫理的視点からの妥当性が審議され、承認を受けている（承認No.2635）。

Ⅲ. 結果

1. 研究協力者の概要：研究協力者は、看護学の学士課程修了時にあり、病院での就職が内定している6名である。

インタビューに要した時間はひとり60分程度であった。

2. 看護学の学士課程修了時の学生が語る「看護職としての『私』」

協力者（すべて仮名で表す）の語りから、「看護職としての『私』」は、6つのテーマと44のタイトルで表された。

1) 「看護職としての『私』」として浮かび上がったテーマ

- ・香山さん（仮名）：《血まみれでもこてんぱんになっても患者さんのために逃げるわけにはいかないから周囲と支え合いながら全力で克服する》。
- ・青木さん（仮名）：《じゃ看護行くかと入学して看護の本質のすごさを感じ、看護の現場の疑問にぶちあたりながら何でもがつつりやって、これからも勉強して広げていく》。
- ・国井さん（仮名）：《「看護師なのかな」と思って入学して教員からの「何で」の突っ込みにさんざんな思いをしたけれど、ひたすら勉強して関心をもって理由づけして迷惑かけないように慣れていく》。
- ・今井さん（仮名）：《ドラマにでてくる看護師や助産師ではなくて、しっかり患者さんや産婦さんを見て、寄り添う気持ちで支えていく》。
- ・浅田さん（仮名）：《看護をつうじて意見をかわしたり、自分の知らない世界を知っている人たちとの出会いは大きくてやっとここまで来たから患者さんや家族の不安に看護師ならではの力で笑顔でかかわる》。
- ・木村さん（仮名）：《ずっと目指してきた看護師として、意志が伝えられない患者さんでも五感からの刺激を大切に看護しながら、認定看護師として定年まで働いてスキルを上げて広げていく》。

以下にこの中から二人の学生の「看護職としての『私』」のテーマ、タイトル、ナラティブテキストの要約、[解釈]の一部を記述する。

2) 香山さんの「看護職としての『私』」

香山さん（仮名）のテーマは、《**血まみれでもこてんぱんになっても患者さんのために逃げるわけにはいかないから周囲と支え合いながら全力で克服する**》であった。内臓破裂で血まみれで運ばれた祖父の死の日を契機に看護師を目指し、支え合う周囲を大事にしながら辛かった講義や実習を乗り越え、今後、就職してからも周囲との支え合いにより、克服しようとしている香山さんの「看護職としての『私』」を表す。このテーマを構成するタイトルは、9つあり、その一つを以下に示す。

タイトル【1）－1 高校生のある日、交通事故で内臓破裂でおじいちゃんが死んでしまった時、泣いている私を見た瞬間、噴き出した血で血まみれなのに、そばにいてくれた看護師さんがいて、看護師しかないって思った】。

ナラティブテキストの要約：「私」は甘ったれで看護師になるのは無理だと諦めていた。高校生の時、おじいちゃんが交通事故で内臓破裂で出血して亡くなった。血があふれていて内臓とか見せられるのは衝撃だった。私はおじいちゃんが嫌でしょうがなくて、その日の朝も「死ぬ」って言って、そのままおじいちゃんが死んでしまってすごい後悔して、すごいわんわん泣いちゃって。その時看護師さんが、自分もストッキングが血まみれなのに、ずっとそばにいてくれた。私は「この人絶対早く着替えたいよな」と思いながらも絶対こんな人になりたいって思った。その日の出来事で看護師になるしかないと思った。おじいちゃんは、人生の選択にいいきっかけをくれた。

[解釈]：香山さんのこの経験は壮絶であり、「内臓とか見せられた」この日の衝撃が香山さんの記憶に強く残っている。大学で看護学を学び、交通事故による内臓破裂と出血した状況の切迫感や帰結を理解できるようになり、血まみれのままストッキングを履く不快さも実感できるようになった香山さんにとって、この日の出来事は看護学を学ぶ中でさらに深く刻印されていったのであろう。「内臓破裂」という専門的な言葉と、「血まみれ、血があふれてて」という当時のままの生々しい表現からは、看護師になろうとしている『私』と、高校生の当時の『私』が内在し、行きつ戻りつしている。香山さんは「甘ったれで逃げしかない自分には看護師は無理」と思っていたが、逃げないで看護師になろうとしている自分に変化したこと、「嫌でしょうがなかった」おじいちゃんが、「人生の選択にいいきっかけをくれた」と思えるようになったことを語っている。

3) 青木さんの「看護職としての『私』」

青木さん（仮名）のテーマは、《**じゃ看護行くかと入学して看護の本質のすごさを感じ、看護の現場の疑問にぶちあたりながら何でもがつつりやって、これからも勉強して広げていく**》であった。医学部を目指していた青木さんは、看護へと進路を変更し、感動しながら

ら看護の本質を学ぶが、実習に出ると学んだ看護と臨床の実際の違いから疑問に突き当たる。就職はCCUに決めているが、自分の積極性から嫌われるかもしれないと懸念し、今後の大学院進学も視野に入れて多様な取り組みを進めていきたいという青木さんの「看護職としての『私』」を表す。このテーマを構成するタイトルは9つあり、その一つを以下に示す。

タイトル【2）－5 看護の現場はこんなもんかと思ったけど、この環境でやるしかないし、患者さんのことで先生に話して気づいて、実際と学びをすり合わせる】。

ナラティブテキストの要約：私は大学入学後、「患者さんに働きかけることが看護」と懸命に学んで実習に臨んだ。基礎実習で高齢患者の多い病棟で実習して、看護師は「ぐるぐる忙しそう」で患者の安楽に配慮しないで、仕事を片付けているという印象をもった。「看護の現場はこんなもんか。人手が足りないとか言ってるけど、だからって増やしましょうで解決しないし、この環境でやるしかないんだから」と思いを巡らせた。実習で気付いたことに、教員の助言を得ながら、講義での学びと現実とをすり合わせていく感じだった。

【解釈】：青木さんは、講義で看護を本質としてとらえてその理論への関心を深め、懸命に学んでいる。講義をつうじて患者の話に丁寧に耳を傾けたり、安楽への配慮に取り組むという看護に対する考え方が形成され、患者に目線に向けて人としての患者を第一に実践しようとしている。実習で出会った看護の現場の現実に限界を感じながらも、理想とする看護実践の難しさに思いを寄せて、譲れない看護への思いを編み直している。看護学を学んだ目線で、熱意をもって臨床の現実を真っ向からとらえ、看護師不足や、設備の不足などの原因を見極めようとしている。教員の助言により、受けとめを広げながら、どんな厳しい環境においても「看護職としての『私』」の覚悟を決めていくことについて語っている。

IV. 考察

本研究における「看護職としての『私』」は、学生として学士課程を学び、看護職を志向しながらも、青年期を生きるひとりの人である。人としての青年期までの生きざまに看護師を目指す契機となる出来事が内在していた。香山さん（仮名）の場合は、看護師を目指す動機の背景にある刻印された経験が看護師への志向と結びついていた。そして、その場面において、出会った看護師の姿が鮮烈な像となって、看護職への動機となり、目指す看護にも影響して「看護職としての『私』」を形成していた。協力者は、ひとりひとりの固有の経験から看護職を目指す動機と看護師として生きる未来への方向性を有していた。

また、協力者の語りからは、実習を通じて「看護職としての『私』」を形成しているようにとらえられた。青木さん（仮名）のように講義を通じて看護学を真摯に学ぶ中で看護を本質としてとらえ、臨床の現場に違和感をもちながらも患者や利用者にも目線に向けてとらえ直していた。協力者は市民や家族の目線と看護職としての双方の視点を併せ持つ存在として、患者の目線を尊重し、看護の現場の現実に向き合いながら、他者とのかかわり合いの中で「看護職としての『私』」を編み直していた。

協力者の語りから、「看護職としての『私』」は、専門職としての看護職への移行において看護職としての言葉や態度などのありようを身につけていく存在であり、他者としてのほかの誰かや何かに向き合い、受け入れつつある中で形成され、時間とともに編み直され続ける存在であると説明できた。

この考えかたを表すメタファーとして宮沢賢治の一文があげられる。その詩集である「春と修羅」には、「わたくしといふ現象は仮定された有機交流電燈のひとつの青い照明です。風景やみんなといっしょにせはしくせはしく明滅しながらいかにもたしかにとりつづける因果交流電燈のひとつの青い照明です」とあるが、「有機交流電燈」と言えるような人生の部分と全体が必然的な関係の中で相互に作用しあい、「ひとつの青い照明」を「せはしくせはしく明滅しながら」生きて未来にまなざしを向けていた。また、「因果交流電燈」と言えるような周りとのかかわり合いの中で、青年期の自己を編み直していると説明できる。「いかにもたしかにとり続ける」灯りは、青年期にある「看護職としての『私』」としての協力者のありようと共通すると考えられた。

今後、未来を担うひとりの看護職としてまなざしを向け、看護職生涯発達学の視座から、学生の個への支援を探求していくことが課題である。

論文審査結果の要旨

平成26年2月17日、佐藤紀子（主査 教授）、小川久貴子教授、守屋治代教授の3名からなる審査委員会が開かれ、学位論文に関する審査が行われた。下記に審査の概要を記述する。

本研究は、著者の看護教員としての20年間の仕事の中で生まれた問いが契機となっている。看護教育が大学教育へと変化する中で、著者も看護専門学校の教員から大学教員へと職場を変え、教育課程の差異について検討する中でこのテーマに照準を定めた経緯がある。本研究では、看護学を学ぶ人をとらえる新たな視座を開発するために「看護職として生涯発達しているひとりの人」として看護学の学士課程修了時の学生をとらえ、その語りから「看護職としての『私』」について記述することを目的としている。このテーマはこれまでの看護学教育研究とは異なる視座から学生の内面を記述することを目指している点で、新規性ならびに独創性があると考えられる。

看護学は看護実践を支える学問であり、看護実践は対象者と看護師との間の相互行為を基盤としている。学士課程で看護学を学ぶ学生は、4年間の学習の中で何をどのように経験しているのか、学士課程修了時の学生の内面から記述することは、看護職という専門職を目指す者を教育する側にとって重要なことである。しかしながら、看護教育を担う教員は、

教員の視点で学生をとらえることで教育を行うのであり、学生の内面から記述することは容易ではない。看護師であり看護教員である筆者が、学士課程修了時の学生の『私』を記述する試みは、当事者研究とも言える要素をも内包しており、研究の過程は試行錯誤の連続であった。即ち、学生の語りのデータと向き合いつつ分析・解釈の方法を見出す作業と、結果の記述方法の模索の作業を同時進行的に行い、その過程で暫定的な記述方法を見出すという過程を踏んだ。その過程を辿る前提として、第一には自身の勤務する大学ではない場における学生の臨地実習の場での「観察者としての参加者」としてのフィールド調査、第二に本調査に先立つ前年度に国家試験受験後であり就職が内定している4年次の学生へのプレインタビュー、そして本調査へと研究を進めた。この過程で、学生をひとりの人として捉える視点を常に吟味しながらデータ収集、解釈を行い、方法論を検討しつつ吟味し、また結果の記述に挑戦することを繰り返した。そのため、本調査の研究協力者は6名であるが、それに先立つ研究者のキャリアと、フィールド調査とプレインタビューが、本調査の結果の記述を分厚いものになっている。

また、本研究のキーワードである「看護職としての『私』」をどのように記述するのかを多くの文献検討の中で吟味した。即ち、ブーバーの「我と汝」、宗教哲学者である上田閑照、臨床哲学の専門家である鷺田清一、教育者であり宗教者でもある宮沢賢治等の述べる「私」について自身のテーマに照らし合わせた検討を丁寧に行っている。

データの解釈は、データと向き合い、自身の先入見を言語化し、さらに上記の文献を下敷きにしつつ「私」を見出す作業の中で往還的に行われた。自身の枠組みからではなく学生の内面そのものに浸る中で見出されたテーマは、それぞれ固有であり、青年期を生きる学生が、講義や演習そして実習で自身と向き合わざるを得ない状況に出会い、葛藤し、そして「看護職としての『私』」を形成していることが示された。

審査の過程では、なぜ学士課程修了時の学生を研究協力者としたのかの記述の曖昧さ、結果の記述に不明瞭性や排除したはずの教員の視点が散見される点、考察の際の文献の使い方が弱い点が指摘され、さらなる洗練の必要性が示唆された。しかし一方で、学生を「青年期を生きるひとりの人」としての立場から理解しようとした試みについて高い評価があった。結果として示された『私』は、「看護学を学ぶ学生」を超えた「より大きい存在」であることから、看護学研究の新しい可能性を提起している点で意義深いという講評もなされた。

以上により本論文は、学位規則第4条第1項に定める博士（看護学）の学位を授与することに値するものであり、申請者は、看護学における研究活動を自立して行うことに必要な高度な研究能力と豊かな学識を有すると認め、論文審査並びに最終試験に合格と判定する。